

一橋論叢第八十五卷総目次

論 説

インド紡績株式会社における経営代理制度の定着過程……………	米川伸一	一	一	通頁
トーマス・ジョブリンにおける合本銀行の構図……………	神武庸四郎	一	二五	三五
不動産貯金銀行の発展構造……………	浅井良夫	一	四〇	四〇
イギリス鉄鋼企業ボルコック・ヴォーン社の投資活動……………				
(一八六五—一九一三年)……………	安部悦生	一	三	三
テキサス (The Texas Company) の成立……………	河合栄三	一	六	六
ユニオニズムと相対賃金格差・失業率……………	白井英一	一	一七	二七
社会主義企業と技術進歩……………	藤垣芳文	一	三六	三六
社会的選択における戦略的選好表明……………	倉林義正	二	一	一七
オーケストラの聴衆とオペラの聴衆……………	松田富美子	二	二〇	二六
演奏芸術の聴衆の構造……………				
——東京地区演奏会の事例分析——				
一八五九年ベンガル地代法の一考察……………	谷口晋吉	二	四〇	一六

F (147) 55

非ワルラス的経済取引の一モデル	楠本捷一朗	二	三〇
近代天皇制の変容	須崎慎一	二	三〇
——近代詔勅考——			
アバーチリジョンソンモデルと投資行動	黒柳遠夫	二	二四七
労働者管理企業の経済行動	阿部望	二	二〇七
金融資本と諸階級	河野裕康	二	二四〇
——『金融資本論』研究の一視角——			
デカルトにおける「実体の表現」の問題	福居純	三	一一
——ヘンリー・モアとの往復書簡に関連して——			
デカルトと仮想仕事の原理など	原亨吉	三	三三
「三十部」あるいは「三十五部」限定の「悪書」について	赤木昭三	三	三五
デカルトと聖体問題	塩川徹也	三	六
——メラン神父宛の一通の手紙をめぐって——			
労使関係と労働争議	平井和秀	三	六七
——フランスの史的推移と現状——			
バルチック海沿岸における漁民の『木印』について	西村朝日太郎	三	一〇一
アメリカ統一商事法典における法典方法論の理論構造	吉田直	三	二五
——法源論・解釈方法論を中心として——			
ジロンド憲法における主権論II選挙権論	伊藤良弘	三	一四
情報科学とその体系化	岡山誠司	四	一

アメリカ革命と外交政策	有賀貞	四	四九〇
財政・金融政策の有効性	野口悠紀雄	四	五〇
企業の合理化と『労働の人間化』	村田和彦	四	五七
ヨセフスの生涯(1)	土岐健治	四	五八
「政治」イメージの政治学	加藤哲郎	四	五九
——マルクス主義的アプローチの場合——			
ソ連民俗学の形成	坂内徳明	四	五九
——一九二〇年代前半のユーリイ・ソコロフを中心として——			
市場価値と超過利潤	松石勝彦	五	一〇一
繊維産業の構造調整と輸入政策	山澤逸平	五	一〇三
公的年金と経済変動	地主重美	五	一〇四
——Indetationの経済効果——			
商取引における契約確認書について	石原全	五	一〇六
「所有と機能の分離」論の一考察	吉村幸男	五	一〇七
——『資本論』体系との関連で——			
規模の経済性と寡占的市場構造の形成	大西幹弘	五	一〇九
呪詛と祝福	長島信弘	六	一一
——ケニア・テソ族のイカマリニヤン・クランを中心に——			
清末中国における「銀行論」と中国通商銀行の設立	浜下武志	六	一一
——一八九七年、盛宣懷の設立案をめぐる批判と修正——			

国際環境法における事前通告・協議制度	岩間徹	六	六	七六
詩人と庭園	加藤光也	六	六	七六
——ポープの場合——				
利子生み資本と貨幣前貸の二つの区別	頭川博	六	六	八〇
社会主義経済の多部門価格形成モデル	田畑理一	六	六	八〇
——二径路価格を中心として——				
『貨幣論』から『一般理論』へ	青木正紀	六	六	八八
研究ノート				
結合生産についての覚書	平井明	五	五	七六
放送衛星による直接放送と国際法	中村恵	六	六	八六
博士論文要旨および審査要旨(鈴木興太郎)		二	二	九〇

報